

この三日間で、木は、その女にちょっと惚れてしまった。女にほとんど興味のない木には、それはひどく珍しいことだ。

女がやっている小さな雑貨屋は、西麻布の片隅にある。住所でいうと、もう広尾になるあたりだ。場所柄、家賃は決して安くはないだろうに、あんな小さな店にガラクタを並べただけで本当にやっていけるのか疑問に思うようなところだ。

と、いつて、女が商売に汲々としていっているようすはない。となると、やはり依頼人のいう通り、お宝を隠しもっているのかもしれない。

女の名前は、ケイ、というらしい。雑貨屋の店名も「K's Favorite Things」という。このフエイバリットシングスの意味がわかったのは、木が昔聞いていたレコードに、ジョン・コルトレーンの「マイ・フエイバリット・シングス」という曲があったからだ。確か「私のお気に入り」とかいう意味だ。

アルファベットの「ケイ」が、本当に「ケイ」という名なのか、「恵」なのか、「恵子」「啓子」あるいは「久美」や「加代」の略か、木は知らない。依頼人も、女の本名は知らないようだった。

た。ただ、「あの店」の女主人としか、木は聞かされていない。

どちらにしても、「ケイ」は「ケイ」で、木は「ケイ」というその女の名前も気に入った。クールな感じがするからだ。

ちなみに木の本名も「木」ではない。木は記号のようなものだ。

木に仕事を頼む連中は、木の名前が何であろうと知っちゃいない。山田^{やまだ}だろうが金^{キン}だろうが、ジョンソンという名だつてかまやしない。要は頼んだ仕事を、木がきちんとやれるかどうか、そこにしか関心がない。

それはある意味でとても公平なことだ。

木が身をおく世界には差別がない、という証拠だからだ。依頼された仕事をこなせるかこなせないか、記号「木」の価値はそこにつきる。

木は携帯電話を四台、もっている。それぞれA、B、C、Dと使い分けているが、うち二台が仕事用のものだ。

木に仕事を依頼する人間は、BかCの電話にかけてくる。Bの番号は「丸B専用」、極道連中に伝わっている木の連絡先で、Cの番号はそれ以外、たとえば水商売や風俗をやっている連中に伝わっている。

Aはいちおう「個人用」にしているが、Aの番号を知っている人間も「業界」には多い。だからたまに仕事がらみの電話がAにかかってくることもある。

Dとなると、これは完全に秘密ナンバーだ。Dを知っている人間は、この世にほとんどいな

い。ひとりか、二人。そしてその人間たちは、こちらから連絡しない限り、まずかけてくることはない。

四台の着信音はすべてちがっているのに、木はどれも鳴っても即座に判断ができる。

今、木はケイの店の斜め向かいにあるカフェテラスでコーヒを飲んでいる。時刻は午後二時を回ったところで、さつきまでは、どこか近くにある幼稚園に子供を迎えにきた若い母親たちが大挙^{たいきょ}してテーブルを占領していた。

どの母親もえらくめかしこみ、なんで幼稚園の送り迎えでこんなに洒落^{しやれ}めかさなければならぬのかと思うほど着飾っていた。その周りを子供たちが叫び、走り回る。

三日間、ここでお茶を飲み、毎日、母子の群れを眺めているうちに、ようやく木にはその理由がわかった。

着飾った母親たちが子供を通わせているのは、いわゆるお受験幼稚園のようなのだ。お受験幼稚園というのは、名門私立小学校に合格させるために子供を通わす、一種の予備校だ。

木がすわっているのは、二階のオープンテラスで、そこは喫煙席なのだが、母親たちの喫煙率も高く、会話が自然と耳に入ってくる。

ケイオーだのセイジョーだのという校名と、エルメスだ、グッチだというブランドが、会話にはほぼ同じ頻度で登場する。

彼女らは、ひとりでテラスの端にすわる木には一切、注意を払わない。見事なほど、その世界は閉じている。お受験の話、ブランドの話、家族の話、以上、終わり。

もつとも木もそれなりの努力はしている。たとえば歌舞伎町のどん詰まりにある喫茶店と、このカフェテラスとは、客の層がまるでちがう。そこで目立たない服装をすることが必要だ。歌舞伎町にいるときは、黒っぽいスーツに白いシャツを着け、髪をオールバックにする。どこかの店のボーイかマネージャーといった雰囲気だ。

ここではジーンズに白いTシャツを着て、だぼつとした柄もののシャツを羽織り、サンングラスをかける。足もとも革靴ではなく、スニーカーだ。テーブルの上には、ニューズウィーク。どこことなく、若き実業家という風情ではないか。これが少年ジャンプならまだしも、週刊大衆では絶対似合わない。

木のすわっている席からは、「K's Favorite Things」の手前半分が見おろせる。陶製の花壇やキャンドルスタンド、あるいはホヤに模様の入った電気スタンドなどがごちゃごちゃと飾られていて、ときどきケイの姿がその中をよこぎる。

ケイはすらりとしていて、身のこなしに無駄がない。髪はわずかに明るいていどの茶で、肩の少し下までのびている。初日、その髪をポニーテイルにしている、木はそれが一番気に入った。店の中でも外でも、ケイはわりに大またで歩く。ジーンズか、長いスカートをはいているのはそのせいだろう。背が高い上に、いつも背すじをのばしているので、よけい大きく見える。

一六七、八センチはありそうだ。

化粧はあまり濃くない。それなりに陽焼けしている。

目がいい。すうっと切れ長で、涼しい感じだ。どんなくそ暑い日だって、汗ひとつかかない

ような目つきをしている。それはいいかえれば、周囲にえらく無関心だということだ。

これは木にいわせれば、疑問の①だ。依頼人から聞かされたように、もしお宝を隠している身なら、周囲に身関心でいるのはひどく難しい。

演技だとすれば、相当気合いの入った演技だ。

ケイはふだん店にひとりだが、たまに手伝いらしい娘がやってきて、店番をかわる。ケイの歳の半分くらい、つまり十六、七の高校生らしい娘だ。こちらは今どきの女子高生には珍しく髪がまつ黒で地味なりをしている。少しぼつちやりしているのが、妙に色気づいていない理由かもしれない。

店の大きさは、せいぜい十坪かそこらだ。ところ狭しといろいろな雑貨をおき、奥に小さなカウンターがあつて、客もおらず、品物の配置もしていないとき、ケイはそのカウンターの奥にすわって本を読んでいる。どんな本を読んでいるか興味はあるが、まだそれは確かめていない。

ケイの住居は、店から西にいき、広尾をつきつた東二丁目だ。渋谷駅と恵比寿駅のちょうど中間にある、古い賃貸マンションで、家賃は二DKで十二万八千円。自転車でそこから店へとケイは通っている。マンションはオートロックもない古い造りで、そこが木の疑問その②になる。

防犯上、決して安全とはいえないそんなマンションに、果たしてお宝を隠した女が住むだろうか。少なくとも、店にも自宅にも、ケイはお宝を隠してはいない。それだけは確かだ。

木にこの仕事を依頼してきたのは、坂本と花口という二人組だった。鳴らした携帯はCだ。木はいちおう、自分の番号を誰から聞いたか訊ねた。坂本はある男の名をいった。そいつはフリーの取り立て屋で、確かに木は何回か仕事を請けおったことがある。だがこの二年、傷害罪で別荘暮らしをしている筈だった。坂本がその男の古い友だちでないとするれば、別荘仲間だった確率は高い。

もちろんそんなことは仕事を断わる理由にはならない。むしろ難点があるとすれば、この仕事の出口が見えないところだ。

出口というのは、もちろんお宝だ。ケイが、坂本と花口のいう通り、お宝をどこかに隠しているなら、それを見つけたせば仕事は完了する。お宝の五分の一が木のとり分だ。それでも千万単位になると二人は保証した。

お宝がなければ、木のかけた時間と手間賃を二人は払う。それが総額五十万を超えないうちに決着をつけてくれと坂本がいったのは、五十万くらいならとりあえず用意ができるという意味にちがいがなかった。

で、三日目だ。

木の方針は、最初はじっくり観察に徹し、あるていどケイの身辺が見えてきたところで締めつけにかかる、というものだった。

簡単な方法としては、ケイの店を燃やしてしまう、というものがある。木の目から見ればガラクタでも、海外のあちこちから貫い集めてきたような商品には、それなりの価値がある

だろう。といってケイはそれらに保険をかけているとも思えない。火災保険はせいぜい、店子として開店する際に不動産屋から強制された金額か、それに毛が生えたていどだ。

店が燃えてしまえば、ケイは人生の転換という奴を考えざるをえなくなる筈で、そうなったら隠しておいたお宝に手をつけることになる。

そのときが木の出番だ。ケイがどこにお宝を隠しているかわかれば、たとえそれが銀行の貸金庫だろうと何かしら手段はある。

問題は、お宝がなかった場合だ。

もともとお宝は、坂本と花口が、ケイの昔の男と組んで踏んだヤマでこしらえたものだった。ところがその男がひとりでトンズラしたあげく、誰かに殺され、お宝は行方不明になったのだ。ケイの生活を見ている限り、といつてもわずか三日間だが、木にはお宝を隠しているようには思えなかった。

それは初日、ケイを初めて見たときに直感したことだった。

何もかもがさっぱりしすぎている。うしろ暗そうなところも、不安そうなのも、ましてや隠しごとをして生きてきた雰囲気はかけらもない。

さばさばとしてクールだ。

三日間を通してその印象はかわらず、あげくに木はちよつと惚れてしまった。

別にすぐ抱きたいとか、そういう感情ではない。もう少しそばにいたい。できれば言葉を交せるくらいの仲になりたい、そんな気持なのだ。

ある意味、抱きたいという感情よりもこれはまずい。欲しているのが体ではなく、もう少し面倒な、心の部分になっているからだ。

この場合、木の選択肢はふたつ。

実際、ケイに接近するか、適当に仕事を切りあげ、さっさと忘れてしまうか。常識なら、後者だ。

だがケイがお宝を隠していないのなら、別に近づいたところで何ら問題はない。お宝をもっていたら、友情は成立しないだろう。何といても、こちらはそれを奪うのが仕事だから。つまり、もっていないと思えば思えるほど、木はケイに近づきたくないというわけだ。

これは困った状況だ。ただすぐに答をださなければならぬというものではない。坂本が保証した五十万の手数料の限度いっぱいまでに決断すればいいことだ。

だいたい一週間、自分に大甘で十日、と木は期限を設定した。つまりまだ四日から七日ある。そう思うと、少し気持が楽になった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。